

「教会に働く体能の力」

エペソ人への手紙 1 : 19 - 23

April.24.2022

エペソ人への手紙 1 : 19 - 23 (パウロ)

Preface

ここまでエペソ書 1 章の使徒パウロの祈りについて 5 回に渡って考えてきましたが、パウロの祈りを一言で言いますと、「まことの神様を知れるようにしてください」というものでした。

パウロは、自分自身の願望やこれから起こって欲しい事柄を神に求めることをもって祈りとはせず、「神さまがもうすでに成して下さっている言葉に出来なほどの重大なことの重大さについて、より良く知ることが出来るようにしてください」と祈りました。

そして「神について知ることほど重要なことはない」ということを、その祈りを通して私たちに教えてくれました。

結局のところ、私たちの信仰の深みや厚みは、使徒パウロの祈りにあるように、「神様とはどういうお方なのかを知ること」、「その神様が何を期待して私たちを召し出したのかを知ること」、「神様がどのように私たちをもてなし、今もどのように私たちの内で、人生で、その大能の力を働かせてくださっているのかを知ること」に比例していきます。

少し時間が経ってしまいましたが前回のメッセージでは、私たちの内に、人生に働く神の大能の力について考えましたが、今日は、その神の大能の力が働いている最も端的な例、対象である教会について考えていきたいと思えます。

Part One

もう一度エペソ書 1 : 20 から見てみたいと思えます。

エペソ人への手紙 1 : 20 - 23 (パウロ)

教会というものが何なのか、その価値を明確に知ったならば、私たちは教会のために何かしらでもやりたくて、むずむずしてくるはずですよ。

神の大能の力の働きによって、死よりよみがえったイエス・キリストは、天に昇られ父なる神様の右の座に着かれ、私たちが知っている物から知らない物まで (知らないことの方が遥かに多いと思えますが) ありとあらゆるすべてのもの、万物がキリストに従い、また従え、すべてのものの上に立つかしらとなられました。

そのような万物のかしらなるお方イエス・キリストが、教会のかしらとなられ、教会はその方のからだとなりました。

神であられるお方が、教会無くしては満足もせず、喜びもしないばかりか、ご自身神としての存在そのものを自ら認めることをされないとまで仰るのが、教会です。

23節に「教会はキリストのからだであり、すべてのものをすべてのもので満たす方が満ちておられるところ」とありますが、要するに、神様の最大の関心事は教会であるということです。

教会こそ、神がすべてのものを満たしたいと思っておられる対象であり、その栄光を豊かに満たしてくださっているところです。

ただ聖書が教会と言った時、一義的には建物でもなければ、組織や機関でもありません。

キリストを信じる私たち聖徒一人一人をからだとし、主導権と意志意図を司るかしらがキリストである有機的かつ命を持った神に連なる一つの生命体が教会です。

教会は、切っても切れない、キリストと私たち聖徒とが繋がっている有機的かつ命を持った一つのからだです。

頭と体が別個になっていたら、そこに命はありません。

頭と体がつながっていてこそ命です。

もし私の指が切れてしまったら、誰が痛いでしょうか？

私です。指ではありません。

もし私の手を書いた答案用紙が0点だったら誰が恥ずかしいでしょうか？

私です。私の手ではありません。

もし私の右足がゴールを決めたならば、誰が誇らしげにするのでしょうか？

私です。私の右足ではありません。

私たちのからだは有機的であり、命で繋がっています。

これと同じように、私たちとイエス・キリストは、私が傷つけばイエス・キリストが痛み、イエス・キリストが誇らしく思われるならば私が誇らしいというように、キリストと私たちとは繋がっていて、そのキリストとの繋がりにより存在しているのが、キリスト者の群れである教会です。

キリストと私たちとは一つのからだです。

だから、私たちがもし「教会のために生きる」と言ったならば、それは、私が私のからだのために生きると、私のからだを手入れするために努力すると、私のからだを保つために発展させるために献げ投資するということと同義語になります。

つまり、私たちの痛みはキリストの痛みであり、キリストが享受する栄光は私

たちの栄光です。

Part Two

ローマ書を見ますと、神の栄光が造られし被造物の中に表れているとあります。

森や海や空や川などの自然の中にも清々しい気持ちになり、感動と恵みを感じますが、その理由を聖書的に言うならば、そこに神の栄光が表わされているからです。

そして、その栄光が完璧に表れ、表したいと神様が思っておられるのが教会です。

大自然に表れる神の栄光に私たち圧倒されますが、それを遥かに超える栄光を現し、表したいと思っておられるのが教会です。

ものすごいことですね。

旧約聖書を見ますと、神様はイスラエルの民たちに分かるように、シナイ山や神の宮や雲の柱や火の柱に神の栄光を表わせなさいましたが、これが新約聖書に入っていきますと、主イエス・キリストのうちに、その生涯に神の栄光を完全に表し、癒し、慰め、救いをもたらしました。

そして十字架で死なれ、復活された後天に昇られ、約束の聖霊をキリストを信じる弟子たちに下さった時、それまで怖気づいて隠れていた彼らが堂々と神の栄光のあらわれである主イエスの復活を宣べ伝え、3000人、5000人とキリストを信じる者たちが日に日に増えていき、その一人一人の聖徒たちの存在をもって、神様はご自分の栄光となさいました。

そうして、神の栄光であるキリストを信じる一人一人のキリスト者を集め、共に礼拝を献げる群れを教会とし、今まで絶えることなく生まれ続けさせているのがキリストを信じる群れであり、キリストをかしらとする一つのからだ、生命体である教会です。

イエス様をかしらとするひとつのからだですから、イエス様が望まれることをするのが教会であり、イエス様が再臨される時救いの箱舟の役割を担うのが教会であり、この世にあって神の国のモデルハウスが教会です。

もしかすると世の中にあっては、教会の存在なんかちっぽけなものだと見なされるかもしれませんが、霊の目が開かれて見る教会は、万物の上に立てられているキリストの驚くばかりの栄光に満ちた神の民の集まりが教会です。

キリストの次に、万物の上に立つのが教会です！

神様が私たちのうちに働いてくださり、ご介入下さり、導いてくださるその大能の力の働きが最も際立って表れるところとして、私たちに許可し与えてくださっているのが教会です。

Part Three

また教会は、キリストがかしらでありますから、根本的にイエス様のものです。

マタイの福音書16章を見ますと、ペテロがイエス様に、「あなたは生ける神の子キリストです」と告白しますが、その告白とペテロというキリスト者の上に「わたしは、わたしの教会を建てます」と、イエス様が宣言されます。つまり、すべての教会は、すべてイエス様のものです。

土浦めぐみ教会も当然、私たちのものではなく、イエス様のものです。

何かのものの価値を計る時には、そのものが誰の所有なのか、誰によって作られたのかが、そのものの価値を決めますが、教会が私たちのものであるならば価値はありません。

しかしもし、神であられるイエス様のものであるならば、最高の価値がある存在です。

教会は、神であられるイエス・キリストのものです。

ということは、神様にとって教会ほど尊いものはないということです。

神様にとって、これ以上の価値のあるものは、天にも地にも存在しません。

比較できるものが何一つ存在せず、教会と教会を比較することなんかも至ってナンセンスな話になります。

キリストをかしらとするキリストのからだである教会は、神にとってすべてが尊い存在です。

だから、むやみやたらに非難してもいけない存在が教会です。

もちろん、正すべきことがあれば正さなければなりません、教会は愛すべき存在です。

なぜならば、イエス様が愛しておられるからです。

イエス様がどのような思いで、教会を愛しているのかと言いますと、

エペソ人への手紙5：25－27（パウロ）

イエス様は、教会には足りないところがあって、問題があって、欠点があって、しみやしわがあることを誰よりもよくご存じでありますが、それでも教会をご自分の命を献げるほどに愛しておられます。

そして、いつの日か、傷もしみもしわも何一つない聖なるものとして立たせるために、御言葉と水の洗いによって聖めて、日々接し続け、熱く愛して下さっています。

エペソ人への手紙5：29－30（パウロ）

教会を愛すことは、イエス様が喜ばれることであり、イエス様を喜ぶことです。なぜなら、イエス様ご自身もご自分のからだである教会を憎んだためしもなく、養い育てているからです。

だから、私たちキリスト者が教会を非難することは、私たち自身を非難することになります。

私たちが教会を非難することは、私たち自身の顔を非難し、私の手を、足を、見た目を、中身を、考えを、感情を非難することになります。

もちろん、非難に値することを犯しかねない欠けだらけの罪人の群れでもありますから、一人一人が遜って自分の過ちを認める必要がありますが、それでもイエス様は、ご自分のからだである教会を非難するよりも、愛しておられます。なぜなら、ご自分のからだだからです。

Part Four

ここで一つひとつ質問いたします。

皆さんのからだの内、心臓と肺のどっちが大事ですか？

どっちがかわいいですか？

どっちか一つ取り除けと言われたら、どっちを取り除きますか？

こんな馬鹿げた質問はないですね。

心臓も大事ですし、肺も大事です。

生きるためには、両方無くてはいけませんし、どんなに心臓が動いていることを、肺が呼吸していることを感じ意識できなかつたとしても、それがなければ生きられないということぐらいは、誰にだって分かります。

イエス様の仰る「教会を愛している」という愛とは、心臓と肺の関係です。

どっちも無くては生きられないですし、命を保つことが出来ません。

切っても切れない心臓と肺の関係が、イエス様の仰る「教会を愛している」という言葉の意味です。

私たちは、皆一つのからだです。

男と女、年齢、出身、背景、経験、考え、仕事、勉強してきたことすべて違いますが、すべてがキリストをかしらとする一つのからだです。

もし一つのからだであることを望まないならば、キリストがかしらであり、王であることを望んでいないことにもなりかねませんし、私がキリストに繋がっているキリスト者であることを否定することにもなりかねません。

からだの部分である他者を拒絶し、非難しながら、クリスチャンであるということほど、神様から見て矛盾していることはないですね。

心臓が肺を嫌だと言いますか？

肺が心臓を嫌がることがありますか？

キリストをかしらだと、主だと、王だと言いながらも、実際は、自分が望むように、自分の望むように事を動かすために、人をさばき、切り捨てるならば、それは、自分がキリストのからだであることを、自分の心臓を、自分の肺を自ら否定することになりかねません。

果たして私たちは、イエス様のように、「出来るならばこの杯をわたしから取り除いてください。しかし、わたしが望むようにはなく、あなたが望まれるままになさってください」と、私の考えや思いを折って教会に仕えたことがどれくらいあるでしょうか？

私の思いや考えが折られたことを喜んで、感謝しながら、教会に他者に仕えたことがどれくらいあったでしょうか？

むしろ、私の思い通りにならないことに顔色が変わったことが幾度もあったのではないのでしょうか？

サタンは、悪霊どもは、キリストのからだである教会を引き裂こうと虎視眈々と、いつも狙っています。

キリストのからだである私たち一人一人の心、考え、傲慢、怒り、正義感、正しさ、経験、知識、常識、経済観、金銭感覚などに付け込んで、いつも私たち自ら体を傷つけさせようと誘います。

ですが、その攻撃から守り、十字架を見上げさせ、ひとつになる心を下さり、お互いを愛するハーモニーへと導いてくださる方が、聖霊なる神様です。

この聖霊の下さる調和こそ、教会にあらわれる神の栄光ですね。

Part Five

今から約150年前、アメリカイリノイ州のエバンストンという都市に、第一バプテスト教会という教会がありました。

ですが、その教会で、アフリカ系アメリカ人黒人の方々に「金輪際教会の敷地に足を踏み入れないでくれ」と言い放つ蛮行を働きました。

イエス様が主であり、王であり、かしらであるのではなく、自分たちが教会のかしらとなって、神の栄光を覚えることの出来ない霊的盲目状態に陥った末の蛮行でした。

そして、出て行った黒人のクリスチャンの方々は、第二バプテスト教会を建て上げ、そこで信仰生活を送るようになりました。

そんな争い葛藤の関係が100年続いたのですが、1991年に第一バプテスト教会の300人の信徒たちが、3000人が集まる教会に成長していた第二バプテスト教会に、100年前の自分たちの過ちを赦して欲しいと正式に謝罪をし、それを第二バプテスト教会の人々は快く受け入れました。

それからは、二つの教会が事あるごとに協力していき、その美しい関係は教会内に留まらず、町の人々にも影響を与えていきました。

面白いことに、どんなにイエス様の話をしても、神様がいらっしゃってその神様を信じているという話をしても分かってくれない人々が、社会が、お互いに愛し合うという姿には反応を示すのです。

愛し合う姿に、人々は、世は惹かれるようになっていきます。

なぜなら、本当は皆、美しい愛の関係、平安な関係を求めているからですね。

キリストのからだである私たちが互いに愛し合う姿を見て、人々がイエス様を受け入れる心が開かれていきます。

でももし、そこに愛がないならば、人々にとって魅力はないですね。

土浦めぐみ教会で言うならば、教会の中で行われている4つの事業も然りですね。

幼稚園も、学校も、福祉事業もみんな世の中にもう既にありますし、施設や人員や伝統などから見れば、社会の中にある幼稚園や学校や福祉事業の方がよっぽど立派かもしれません。

じゃなんで、あえて教会がそれらをやらなければならないのか？

それはただ一つの理由です。

そこに、キリストをかしらとするからだを、からだという愛を体現することです。

クリスチャンである職員同士の愛の体現に、子供たちや親たちやご利用者の方々に、また社会に、そこには世にはない愛があることを見て、感じていただくこと、これがないならば、教会が事業をやら意味がどこにあるでしょうか。

Part Six

私たちがイエス様を信じてある意味一番辛く、恥ずかしくて、後悔することは、同じクリスチャン同士裁き合い、争い、分断してしまうことです。

じゃ、何でそうしてしまうのか？

知らないからです。

完全に悪魔に騙されて、振り回されてることを知らないからです。

何が正しくて、何が間違っているのかだけに執着するならば、私たちは完全に騙されます。

パウロが独り善がりの神に対する熱心によってキリスト者を取っ捕まえて行ったように、エズラが信仰の熱心によって異邦人の妻たちや子供たちを追い出してしまったように、正しさだけを追求していった時、私たちは結果的に傷つけ合ってしまうことがあります。

サタンは、明らかな悪よりも、正義感や正しさを用いることを知っている狡すっからい策略家です。

聖霊の働きは、他者を、イエス様が姦淫を犯した女性を赦し受けとめ、その成長を信じてあげたように、抱いてあげることです。

まずは、キリストを信じる聖徒同士、心臓と肺の関係のように愛し合うことが、キリストのからだとしての任を全うすることになります。

私たちは教会のリバイバルを願っていますが、教会のリバイバルは、いい説教をすることとか、いい音楽を奏でることとか、教会の規模が大きくなることは根本的に違います。

「イエス様が教会の本当のかしらとなって、イエス様が望まれるように、イエス様が指示されるとおりに、すべての聖徒がひとつのからだとして互いに受け入れ合い建て上げる教会」が、まことの教会のリバイバルです。

これ以外、これ以上のことは、私にもよく分かりません。

私たちが何かをやって成る教会ではなく、神様がさせたから、させてくださったからなる教会、そこに神の愛が見られる教会、これよりもワクワクする教会はないでしょう。

そういう教会になるために私たちがすべきことはただ一つです。

いつもイエス様を見上げること、イエス様のことを思うこと、これだけです。

かしらであられるイエス様を見上げ、奉仕し、礼拝し、献げ、働き、集まり、学ばばいいだけですが、実際には、イエス様を見上げていない時が多々あるといのが本質的な問題でしょう。

私たちだけで集まり、私たちだけで考え、私たちの思いや常識や計算だけで決定して、何かをやります。

ちょっと祈りはしますけれども、でも結局は、自分の望むように、自分たちの思う通りにします。

そうになってしまう理由はただ一つですね。

イエス様が肉眼では見えないからです。

肉眼で見えるならば、私たちでもいちいちイエス様に聞くことでしょう。

「イエス様、これはどうしましょうか、あれはどのようにお考えですか」と聞くことでしょう。

でも目には見えないので、結局自分の、自分たちの思いで事を進めて行きます。

「きっとイエス様もこれを望んでおられるから」と、自分に言い聞かせながら、正当化しながらです。

でももし、目には見えないけれども、物理的な限界を遥かに越えて、いつもイ

イエスが私たちと一緒に居ることを信じてイエス様を見上げるならば、教会も、私たちの生活も、静かだけれども確実に、驚くほどに変わることでしょう。

このぶつとい聖書は、そのことを始めから最後まで、一貫して言い続けます。言っていることは、どこを見ても一緒です。

「主イエスを見なさい！ かしらであられる主イエス様を見なさい！」です。

Part Seven

私たちは色々と祈りますが、どんなことがあっても必ずや応えられる祈りがひとつあります。

それは、イエス様を求める祈りです。

神様がみなさんに今日、「あなたがたに、わたしが何をしてあげることが望むか？」とお訊きになったら、何を望みますか？

その神様の問いに対する正解があります。

それは、「神様、私は他のものはいりません。 私はただ、イエス様を望みます。 イエス様お一人だけで十分です。」

ここにすべての答えがあります。

私たちに必要なものすべて、みんなイエス様から来ます。

教会は、イエス様が建て上げ、イエス様が教会のかしらであるために、教会に必要なもの、またそのからだである私たちに必要なものすべては、全部イエス様から来ます。

お金も、人も、材料も、食料も、土地も、建物も、愛情も、配慮も、忍耐も、預言も異言も、すべてイエス様から来ます。

イエス様だけ見ていれば、私たちに必要なものはすべて下さいます。

そしてここで、私たちが知っておかなければならないイエス様にしかお出来にならないことがあります。

ある一人の人が、自分の望むまま自分の欲に従って、自分の名誉と刺激のために生きていた人が、自らの罪深さを悟り、心から悔い改めるようになること、イエス様にしか出来ません。

人が教えて出来ることではありません。

自分のためだけ生きていた人、徹底して自己中心的に生きてきた人が、神様が自分のことをどれだけ愛しておられるのかを悟り、その神様の愛の前に涙を流しながら神様の愛を受け入れ、これからは人を助け愛する人になること、イエス様にしか出来ません。

これも人が教えて出来ることではありません。

大変で、疲れて、苦しくて、誰も認めてくれない息が詰まるほどの悲しみに陥っているとしても、神様は変わらず生きておられ、私を愛しておられることを知り、心から賛美が歌え、感謝の思いが湧きあがり、自分こそ助けてもらわなければならない状況や状態にあっても、他者を助けてあげるようなことを、私たちが教えて出来ることでしょうか？

イエス様にしか出来ません。

これらみんな、人の人生において最も大事な事、すべてイエス様から来ます。イエス様は、私たちの人生そのものを、生き方そのものを変えてしまいます。教会のことだけでなく、私たちの人生のすべての良いことは、すべてイエス様から来ます。

私たちがイエス様を求め始めるならば、私たちの人生のみならず、教会も変わります。

イエス様を求めるならば、神様が天の門を開いてくださいますね。

Conclusion

神様が教会に抱いておられる思いやご計画は、ものすごいものです。

この世にあって、天国を見せてあげるのが教会です。

人々に、まことの神様が生きておられることを見せてあげるのが、教会です。

「私はまだ、そんな教会を見たことがありません」と思うならば、今日皆さん、何を信じるのかをお決めになって下さい。

今日まで生きてきた私の経験を信じるのか、それとも、神の言葉を信じるのか、をです。

神の御言葉を信じて、私たちが集まる度に、イエス様が王であられることを宣言し、イエス様が望んでおられることを望み、イエス様だけを見上げ、イエス様だけを求めるならば、神の言葉通りに神の栄光を体験し、神の栄光があらわれる教会が建つことでしょう。

そういう教会が、人を活かし、世を生かします。

「教会が生きる時、世が生き、教会が死ぬ時、世が死ぬ」というような言葉をお聞きになったことがあるかもしれませんが、事実です。

なぜならば、「教会はキリストのからだであり、すべてのものをすべてのもので満たす方が満ちておられるところ」だからです。

お祈りいたします。

祝祷：エペソ 1：23